安土城

安土築城

戦国の覇者・織田信長が、日本のヘソともいうべき枢要の地である観音寺山の一支尾根、標高 199mの安土山にその居城を築かんと工を起したのは、天正4年(1576)正月の中旬であった。ところが、着工後わずか1ヶ月余りの2月下旬、早くも建物の一部、おそらく信長のための仮殿が完成したとみえ、信長は、岐阜より安土に移っている。

その後、4月に入ると石垣を築きはじめるとともに、天守を建てるために、畿内およびその近国の諸侍をはじめ、京都・奈良・堺の大工や諸職人を召し、さらに唐人の一観に唐様の瓦を焼かせている。

この唐様の瓦が、具体的にどのような瓦であるか、いまだ明らかでないが、『イエズス会日本年報』のなかに、「この塔もその他の家屋も皆世界中で最も堅牢なる青い瓦で覆い、その前面には金を被せた円形の頭がある。」と記されていることから、一般には、瓦に青（緑色と解されている）の釉薬を施したものではないかとされている。しかし、現在までのところ、安土城出土の瓦で、釉薬を施した瓦は一点も発見されていないので、唐様の瓦が、施釉瓦をさすものでないことは明らかである。

安土城から出土する瓦には、青味がかった青灰色の瓦と、赤茶色の瓦の二種類がみられる。いずれの瓦も色が褪めたような淡い色を呈しているが、なかにごく少量ではあるが、表面に光沢をもつ色鮮やかな瓦が含まれている。この光沢のある瓦は、火をうけた痕跡がみられないことから、その色調は、当初の瓦の色に近いとみてさしつかえないであろう。おそらく、現在みる淡い色の青瓦も赤瓦も、もとはすべて光沢をもつ色鮮やかな瓦であったが、火をうけたり風雨にさらされたりして退色したと考えられる。唐人一観の焼いた瓦とは、あるいは、この光沢のある色鮮やかな瓦を指すのではなかろうか。

石垣の石は、観音寺山や長命寺山・長光寺山・伊庭山などから運ばせたが、なかでも蛇石とよばれる大石は、一万人の人間が三日三晩かかって、ようやく引き上げたといわれるもので、宣教師フロイスの『日本史』にも、「特別の一つの（石）は6・7千人が引いた。そして人々が確言したところによれば、一度少し片側へ滑り出た時に、その下で 150人以上が下敷きとなり、ただちに圧し潰され、砕かれてしまったということであった。」と記されている。

現在、安土城跡には、蛇石に類するような巨石はどこにもみあたらないが、地元の人は、天守西側の石垣の崩れのなかほどにあったとされる石（本丸入口左手に置かれている）を蛇石と称している。たしかにこの石は、安土城の石垣の石のなかでは大きい方に属するが、だからといって、一万人もの人間を要するほどの石でもない。

それでは、安土城廃城後、どこかに持ち去られたのであろうか。八幡山城や彦根城を築くとき、安土城の石を持ち運んだことが知られているが、蛇石あるいはそれに類した巨石を運んだという記録や伝承はない。ということは、蛇石は、いまだ天守のどこかに眠ったままになっているということになるが、はた

1983. 6. 30
財団法人 滋賀県文化財保護協会

絹本著色織田信長像

摠見寺蔵

してどこに眠っているのであろうか。

天守移徒と信長の誕生日

起工より一年半過ぎた天正５年６月、信長は、有名な13ヶ条よりなる「安土山下町掟書」を出しているが、これは、安土城および山下の城下町の体制が、ある程度整備されたことを示すものと考えられている。ここに天守もいよいよ本格的な普請がなされることになったようで、同年８月24日に「柱立」が、10月３日には「屋上葺合」が行われている。そして、近世の黎明をつげる５層７重の天守が内外観ともにほぼ完成されたのは、天正７年（1579）正月頃であったと考えられている。

しかし、信長が正式に天守に移徒したのは、同年５月11日と、約半年も後であった。信長が、天守への屋移りをなぜ半年近くも引き延ばしていたのかは明らかでないが、一説には、この５月11日が、信長の誕生日であったためではないかとされている。

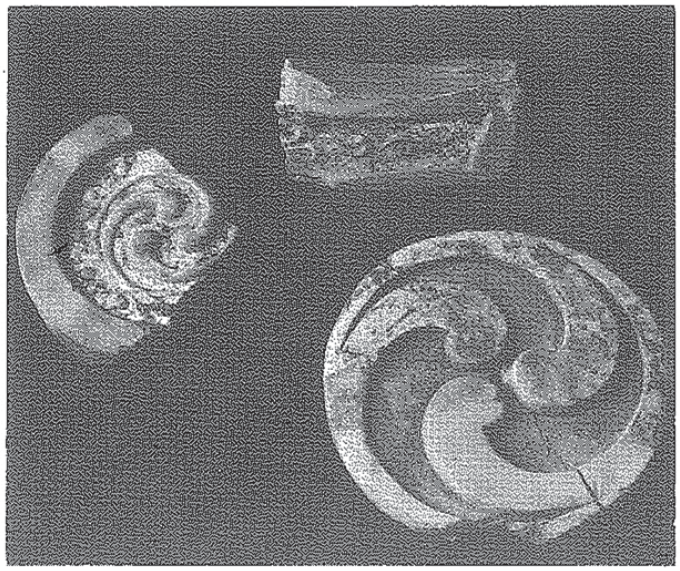
信長が、自分の誕生日を特別視していたことは、フロイスの『日本史』に、「彼は領内の諸国に触れを出し、それら諸国のすべての町村・部落のあらゆる身分の男女・貴人・武士・庶民・賤民が、その年の第５月の彼の生まれた日に、同寺(摠見寺)とそこに安置されている神体を礼拝しに来るように命じた。」と記されていることからも明らかである。

信長の天守移徒によって安土城の普請はすべて完成したわけではなく、その後も、天守や本丸等で諸種の作事が続けられていたようである。しかし、それも、天正９年(1581)９月８日、絵師の狩野永徳父子や、錺金具の宮西遊左衛門、金工の後藤平四郎等の諸職人をはじめ、普請奉行の木村次郎左衛門父子が、信長より小袖を拝領していることから、この日をもってすべての作事が完了したと考えられている。ここに、天正４年正月より始められた安土城の普請は、実に６年近い歳月を費してようやく完成したのである。

天守の外観と内観

安土城天守の高さは、16間真中、すなわち約33ｍで、外観は５層、内部は地階の石蔵を入れて７重となっていた。５層のうち、４層目は八角形、５層目は正四角形であったという。１～５層の基本的な外装は、木部はすべて黒漆塗り、その他の露出する壁は、白漆喰仕上げであったが、八角形の４層目の外柱は朱色、四角形の５層目の外柱は金色であった。

屋根には、「しごく気品のある技巧をこらした雄大な怪人面が置かれている。」と、フロイスが『日本史』で記しているように、さまざまな文様の鬼瓦が飾られていた。また、後世、天守の象徴ともされる金箔の鯱も飾られていた。安土城天守といえば、直ちに金箔瓦といわれるほどであるが、金箔瓦といっても瓦全体に金箔が押されているわけではなく、軒平瓦や軒丸瓦の文様の部分、いわゆる瓦当にのみ金箔を押したものである。しかも、金



安土城出土金箔瓦

箔瓦の出土量からみて、天守のすべてに使用されていたのではなく、4層と5層ないしは3層から上だけに葺かれていたと考えられている。

天守の内部は7重、すなわち地階石蔵1階、石垣上6階よりなる。石蔵は、その大部分が土蔵として使用されていた。天守の各階は、金碧障壁画で飾られていたが、石垣の上1階の信長の居間だけは、墨絵で梅が描かれていた。その部屋には、遠寺晩鐘の景色を描いた付書院が設けられて、その前に〝盆山〟とよばれる石が置かれていた。この石は、「予自らが神体である」と言っていた信長の化身とみられている。居間に続いて、雉の子を愛する所の絵を描いた4畳敷の御座間、さらに鵝の描かれた12畳敷の対面所、そして、儒者が描かれた8畳敷の控の間があった。この他、この階には膳を拵える部屋が2ヶ所、納戸が7ヶ所、土蔵が1ヶ所と計19の部屋があった。

2階は、花鳥の描かれている4畳敷の御座間、それに対する24畳敷の納戸など10部屋で、縁側は、幅2間の広縁となっていた。主な部屋には、花鳥、賢人、麝香、呂洞賓、駒の牧、西王母の絵が描かれていた。

3階は、畳敷の部屋が7ヶ所、板敷の部屋が3ヶ所となっていた。このうち、畳敷の部屋の1ヶ所は、泥壁仕上げであることから、茶座敷と考えられている。絵画は、板敷の部屋が、岩、竹、松、畳敷の部屋が、龍虎、鳳凰、許由巣父、てまりの木、鷹となっていた。

4階は、木屋の段とよばれているように屋根裏部屋であるが、南北の破風の下に4畳半の座敷がそれぞれあった。

5階は、対角線が4間ほどの8角形の平面で、高欄擬宝珠をつけた縁側が八方に廻っていた。室内の柱はすべて金箔で、障壁画には釈迦十大弟子が描かれていた。

6階は、3間四方の平面で、外側には高欄のついた廻縁がつけられていた。部屋の内部はすべて金箔で、障壁画には、狩野永徳の描いた三皇五帝、孔門十哲、商山四皓、七賢人の絵がかかれていた。

安土城天守焼亡

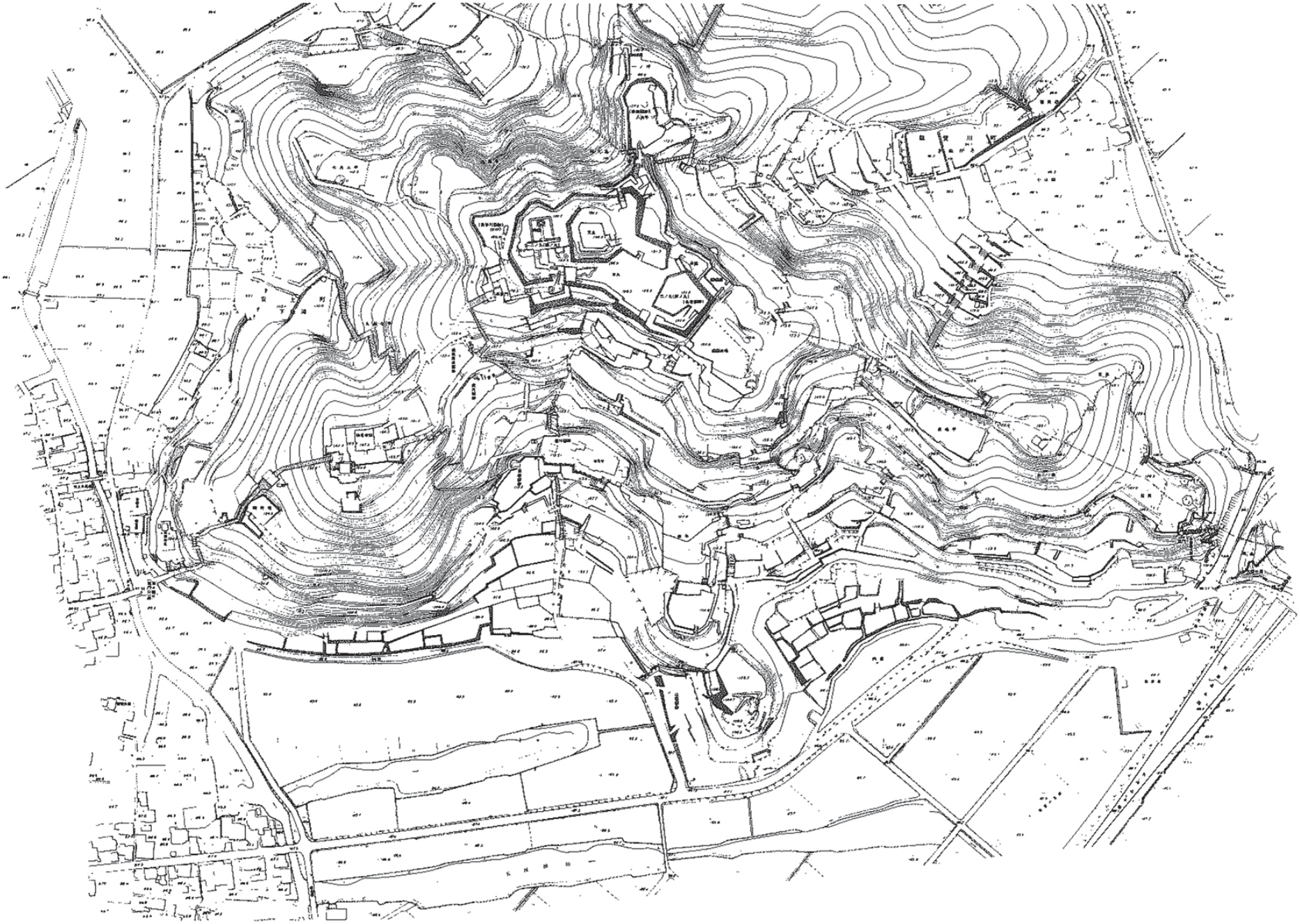
天正10年（1582）6月2日の未明に起った本能寺の変は、巳の刻、すなわち、その日の午前10時過ぎには安土城に達していた。この時、二の丸の留守居役であった蒲生賢秀は、「信長公、年来、御心を尽され、金銀を鏤め、天下無双の御屋形作り、蒲生覚悟として、焼き払ひ、空しく赤土となすべき事、冥加なき次第なり。其の上、金銀・御名物乱取り致すべき事、都鄙の嘲哢、如何が候なり。」（『信長公記』）と、城内の金銀財宝等には一切手をつけず日野城へ退去した。

信長を倒した光秀は、直ちに安土城に入らんとしたが、瀬田の唐橋を焼き払われたため、6月5日にやっと入城した。入城した光秀は、天守に所蔵されていた財宝を家臣に分配するとともに、味方の獲得に奔走したが、十分な成果をあげられないまま、備中高松より東上してきた秀吉軍を迎え討つため、女婿の明智弥平次秀満を安土城に残して西下した。しかし、13日、山崎での敗報に接した秀満は、翌14日、坂本城に退却した。

安土城天守は、この秀満が、坂本へ退城する際に火をかけて焼失させたとする説と、翌15日に入城してきた信長の二男信雄の兵が、

安土城跡実測図

（提供・滋賀県教育委員会）



落武者狩りのために放った火か、近在の土民の恩賞めあて、ないしは略奪のために放った火が、城下から城内に移ったとする説、および、信雄みずからが天守を焼いたとする説に分けられる。このうち、秀満放火説は、当時の公卿の日記（『兼見卿記』）に、天守炎上を15日と記していることや、後に述べる宣教師の記録などから否定される。とすると、城下よりの類焼説か信雄放火説かのどちらかであるが……。

安土城は、南西の摠見寺表参道である百々橋口が、幅10m足らずの水路をはさんで、直接城下町に接している以外は、北・東・西の三方を湖に囲まれ、南を百数十mの堀（沼）によって隔てられている。したがって、城下の火が天守に及んだとするならば、その延焼は、百々橋口→摠見寺→将士の屋敷→天守のルート以外には考えられない。ところが、城下に最も接し、城下と天守の中間に位置する摠見寺が、山門をはじめ、本堂・三重塔などの全伽藍が、江戸時代末まで残存しているのである。しかも、現況で判断する限り、安土城は、全山が灰燼に帰したのではなく、焼失したのは、天守と本丸を中心とした地域のみであると考えられるのである。このことは、天守の焼失が、城下よりの類焼ではなく、他の別の原因によって焼失したことを物語っている。

『イエズス会日本年報』1582年11月5日（天正10年10月20日）付、ルイス・フロイスの書翰に、「安土山においては、津（摂津）の国において起った敗亡が聞えて、明智が同所に置いた守将は勇気を失い、急遽坂本へ退いたが、あまり急いだため、安土には火を掛けなかった。併し主は信長栄華の記念を残さざるため、敵の見逃した広大なる建築のそのまま遺ることを許し給わず、附近にいた信長の一子（信雄）がいかなる理由によるか明でなく、智力の足らざるためであろうか、城の最高の主要な室に火をつけさせ、ついで市にもまた火をつけることを命じた。」と、信長の二男信雄が、天守に火をつけ、そののち、城下にも火をつけたと記している。これならば、天守と城下町が焼失（近年の発掘により焼土層を確認）し、摠見寺が焼失しなかった理由が、きわめて合理的に説明される。それにしても、信雄は、なぜ父のつくった天守を焼いたのであろうか。

いずれにしても、築城開始から6年半、天守竣工からわずか4年で、豪荘雄大を誇った世紀の建築、安土城天守も、〝人間50年〟と詠い、49歳で死んでいった信長とともに滅び去ったのであった。

天守焼亡後の安土城

天正10年6月13日、明智光秀を山崎で討ち破った羽柴秀吉は、16日、天守の焼け落ちた安土城に信長の三男信孝とともに入るが、直ちに清洲に向かい、27日、信長の後継者として、信忠の嫡男、当時いまだ3歳の三法師（のち秀信）を擁立した。三法師は、安土城の修築が終り次第入城するはずであったが、秀吉と三法師の後見人の信孝の確執のため安土に入城したのは、信孝の失脚後の12月20日であった。翌天正11年正月、信孝に代って三法師の後見人となった信雄は、城下に掟を出し城下の復興にとりかかった。

しかし、天正12年（1584）3月、秀吉の下風に立つことをいさぎよしとしなかった信雄は、家康と結んで秀吉に戦いを挑んだ。このため、安土城下は、再び戦乱に巻き込まれるのではないかと人々は恐れたが、8ヶ月にも及んだ合戦も、秀吉の老獪な外交戦で終結となり、天正12年11月、秀吉と信雄との間で和議が成立した。ここに秀吉の天下人が確定し、織田家は、その勢力を完全に失墜してしまった。安土城もまた、この織田家の盛衰に運命をともにし、天正12年12月5日、三法師が坂本城に移されるや、再び主を戴くこともなく、叢林の間に埋れていった。

（秋田裕毅氏提供）